二

坂崎磐音が山陰路の最後の難所の老ノ坂を越えたのは、葉月も明日で終わるという日のことだ。

十輪寺、勝持寺を横手に見て、大原野を過ぎ、樫原を抜けた。

桂離宮のかたわらを過ぎて桂川の渡しを渡れば、もはや山陰路も終わりに近い。

丹波口近くに奈緒が売られた島原の遊里があることを磐音は承知していた。

昨夏、半改革の夢を抱いて国表に帰路の途中、磐音は河出慎之輔、小林琴平の三人で京に宿泊した。

「そなたらを無理には誘わぬ。だが、独り身のおれが島原に挨拶もせず国に戻ったとあっては蕩児の名折れ……」

と分からぬ理屈をつけ、妻帯者の慎之輔と祝言を控えた磐音を旅籠に残して、琴平は島原に出かけた。

翌朝、磐音と慎之輔は、琴平を島原に迎えて、その足で大阪に向かったのだ。

いまはそれも懐かしい思い出となった。

諸行無常、すでに友二人は鬼籍に入っていた。

磐音は、奈緒がいるという島原のかたわらを抜けて、四条河原町の旅籠に向かった。

京の傾城町の島原は、天正十七年に原三郎左衛門と林又一郎という浪人の上訴によって開かれた古い遊郭だ。

冷泉万里小路に開かれた遊里は、武門にいた者が始めたことで新屋敷と呼ばれ、柳が二本植えられていたので別名柳町とも称された。

その後、慶長七年に六条に移され、さらに寛永十七年に朱雀野に移されて公許の島原遊郭が出来上がった。

朱雀野の廓をなぜ島原と称するか。

六条から朱雀野に移転した蕩児、肥前の島原で天草四郎の一揆が起こり、天下の大騒動になった。そこで女郎衆の引越し騒ぎに一揆の騒乱をひっかけて、

「まるで島原の乱のようやな」

と呼び始めたのが最初とされる。ともあれ格式を重んずる京の遊里だ。いきなり乗り込むわけにもいかない。

磐音がそんなことを考えながら、鴨川を四条へと上がっていくと、反対に下がってきた細身の武士が路地に曲がっていった。

田野倉源八だ。

なんとよく見かけることよと考えながら、旅姿の源八の背を見送った。

四条河原町にある旅籠、蔦屋は豊後関前藩の家中の者たちが江戸の往来の際に泊まる宿であった。

格子戸を引き開けると細い石畳が玄関先まで伸びて、淡い明かりに打ち水がしてあるのが見えた。

「ごめん」

磐音の声に奥から、

「おいでやす」

と姿を見せたのは、初老の女将だ。

「んまあ、坂崎さんやおへんか」

「突然ですが、部屋はございますか」

「あいにくと全部塞がってますのんや」

と笑みを浮かべた顔で言った女将が、

「心配なさることあらへん。お藩の方がお泊まりどす。相宿したらどないだす」

と言い出した。

「ほう、どなたが滞在なされておられるか」

「まずは草鞋を脱ぎなはれ。会うのんが早分かりだす」

磐音は女将に言われるままに草鞋と足袋を脱いで、袴の裾の埃を払った。

二階への曲がりくねった狭い階段を上がると、中庭に面した部屋の障子の前で女将が膝をつき、

「お知り合いがお見えになりましたえ」

と声をかけた。

「知り合いじゃと」

という声がして襖が開けられると、豊後関前藩の目付頭、東源之丞が風呂にでも入るつもりか、手拭いを下げて立っていた。

源之丞は関前城下の神伝一刀流中戸信継道場の先輩にあたり、磐音と小林琴平との斬り合いにも立ち合った男だ。

「な、なんと、坂崎か」

源之丞が藩主福坂実高の参勤に従って江戸入りしたのは初夏のことだ。

その折り、磐音は薬研堀の水茶屋、涼風に呼び出されて宍戸派糾弾の話し合いをしたことがあった。

「東源之丞様……」

磐音も思わぬ出会いに驚いた。

「まあ、座敷に入れ」

と言った源之丞が、

「いや、一緒に風呂に入らぬか」

と勧めた。せっかちの東源之丞らしい誘いだ。

「なれば、仕度して湯殿に参りますれば、東様にはお先に」

源之丞に代わって部屋に入った磐音は、旅装を手早く解いた。

磐音が湯殿に行くと、源之丞はすでに湯船に身体を浸けていた。

客は二人だけだ。

「東様は、国許にお帰りになる道中にございますか」

おう、と答えた源之丞は、

「江戸藩邸に巣食った宍戸派の面々の裁きもついて一段落いたした。そこで実高様にご相談の植え、帰国いたすことに相成った。それもこれも、正睦様とそなたのお陰じゃ」

正睦は磐音の父親である。

国家老宍戸文六一派との対決を制したのは、正睦、磐音親子の活躍と、江戸から戻って来たお直目付の中居半蔵の助勢、さらには国表の若手藩士たちの呼応があったからだ。

「そうじゃ、正睦様がこの度、殿のご命令で中老職から国家老に出世なされた」

「父上がでございますか」

出世といっても小藩の国家老だ。ありがたくもない役目就任である。

「正睦様しか、疲弊しきった藩の財政を立て直す仁はおられまい。わしも関前に戻り、正睦様を助けて汗を流せと、実高様から命を受けての道中じゃ」

「さようでございましたか」

宍戸文六の専断に端を発した藩騒動もどうやら落ち着きを取り戻しつつあるようだ。

「なんともせわしない秋であったぞ」

磐音は湯をかぶって汗と埃を流し、湯船に入った。

「坂崎、江戸に戻られた中居半蔵どのから、そなたの再びの出奔は聞かされた。奈緒どのとは会われたか」

中居半蔵も江戸に帰着したか。

「さてそれが……」

と関前藩を抜けて以来の経緯を語り聞かせた。

「な、なんと長崎から小倉、赤間関から京と、奈緒どのを追いかけての旅が未だ続いておるのか」

「はい」

「それで奈緒どのはこの京の島原に身売りされたのじゃな」

「朝霧楼という遊郭だそうにございます」

「京はなんにしても仕来り、格式がうるさいところじゃからな。遊郭の位も太夫、天神、鹿恋、曳舟、局、北向と細かく階級が決まっておるわ。朝霧楼はたしか島原の総籬、大見世だからな、一見では座敷にも上げてくれまい」

と源之丞は知識を披露した。

「東様、なんぞよき知恵はございませぬか」

「まずは部屋に戻らぬか」

と磐音を誘った。

部屋に戻るとちょうど膳部が運ばれてきたところだ。

「湯加減はどうでおましたやろか」

「これはこれは坂崎はん、ようおいでなされました」

と膳を運んできた女子衆が如才なく挨拶してくれた。

「酒を切らすでないぞ」

と女子衆に命じた源の丞が膳の前にどっかと座り、

「まずは一献参ろうか。それでのうて知恵も浮かばぬ」

と磐音に燗徳利を差し出した。

二人は思わぬ再会を祝して杯に酒を満たし合い、飲んだ。

「東様、明日にも出立にございますか」

「それじゃが、そなたの話を訊いてこのまま立ち去るわけにもいくまい」

源の丞はすでに助勢する気でいた。

「御用は大丈夫にございますか」

「摂津湊で船待ちしたと思えば、一日二日京滞在を伸ばしたところでなんとでもなる。坂崎、今晩一晩じっくりと考えさせてくれ」

「お願い致します」

磐音のほっとした顔を見た源の丞が言い出した。

「赤間関の遊里を売られた金がいくらと申したな」

「赤間関の楼主は、奈緒どのの身売りに五百両は堅いとみているようです」

「五百で奈緒どのが島原に売られたとせよ。それを身請けするには、何倍もの金子がかかるぞ。どうする、坂崎」

磐音は西国屋次太夫から得た金子が百四十両ほど残っていると言った。

「百四十両では、話にもならぬな」

源の丞が唸り、磐音が、

「ともかくそれがしは、奈緒どのに会ってみることが肝要かと思うております」

「それが京の島原では難しいのだ」

しばらく指南していた源の丞は、

「奈緒どののことはいったんさておき、坂崎、そなたのことじゃ。実高様も、磐音は帰参いたそうなと何度もお尋ねになったわ」

「それがしは、藩を出た身にございます」

「だが、殿はそのように考えてはおられぬ」

頷いた磐音が言い出した。

「関前藩の財政建て直しは、生半可には立ち行きませぬ。上方、江戸の札差、両替商に五万八千五百両、銀建てにして三千六百余貫ての借財がございます。藩士一同、半米借上げを強いられたとしても何十年もかかります」

「それでは生ぬるいな。借金を返す要諦は、ただ二つ、入りを増やすか、出を減らすかじゃ。だが、われらの俸給を半分にしたところで利息返済がやっとのところ、元金など永久に返せぬ。となると、正睦様が献策なされて殿も一度は承知なされた藩内の物産を掘り起こし、藩の物産所を通して上方、江戸に運び込んで高値で売る策しかあるまい」

「はい」

と磐音は承知した。

二人は、ゆったりと燗徳利を互いの杯を満たしつつ、話し込んだ。

「ですが、藩の御蔵には雇船を仕立てる金子らございますまい」

東源の丞が頷くと、

「江戸を出るとき、幹部の方々とも話てきた。来年の参勤明けの下番行列の金子の工面がつかぬそうだ」

江戸から豊後関前まで二百六十余里、三十五泊の下番行列におよそ二千五百両かかった。その費用が捻出できないというのだ。

「東様、それがし、えどの市井の暮らしをして、つくづく商人の力を思い知らされてございます」

「そなたは江戸の両替商、今津屋と昵懇にして参ったからな」

「昵懇と申されてもただの用心棒にございます」

「いや、そうではない。わしは江戸を発つとき、今津屋にも挨拶に参った。そしたらな、老分の由蔵どのばかりか、主の吉右衛門どのがわざわざ面会なされて、いつ坂崎が戻ってこられると矢の催促じゃ。坂崎、豊後関前藩六万石のと威張っても、江戸では貧乏大名くらいにしか思われておらぬ。今津屋に新たな借財に参っても、けんもほろろに断られるのが見えておる」

「そこです」

と磐音が言った。

「そことはなんじゃ」

「それがしが関前に帰参し、藩士の資格にて動いたとしたら、今津屋どのはこれまでどおりのお付き合いをなされましょうか。今津屋には雄藩から高禄の旗本衆の出入りがございます」

うーむと源の丞が唸って、杯を無意識に手にした。

「空にございます。ささ、酒を」

と新たな酒を注いだ磐音が、

「これまでどおりに市井に見を没して、事あらば、関前藩のために働いたほうが藩のためかと存じます」

「できるか、坂崎」

「それがしか方策がございますまい」

「ならば、わしは国表に戻り、正睦様とこのことを相談いたす」

「そのためにも、なんとしても奈緒どののことを解決しとうございます」

と磐音は話を元に戻した。

「よし」

と東源の丞は叫ぶと、

「京のことは京の人間を頼りにするしかあるまい」

「たれぞ知己を思いつかれましたか」

「役に立つかどうか、明日になれば分かる。ともかく会うくらいの算段はしてくれよう」

そう応えた源の丞は、

「坂崎、その先が問題じゃぞ」

「金にございますな」

「そう、金だ。そちらのほうは皆目あてがない」

源の丞が苦笑いして、

「そなたが江戸でやっていたような用心棒稼業を探したところで、京の人間はしわいぞ。今津屋の半分どころか、十分のいい地がいいところだ」

「で、ございましょうな」

「今宵は、飲もう。まずは一つひとつ事を奨めることじゃ」

その夜、東源の丞と枕を並べて寝た。

翌朝、東源之丞は磐音を連れ出した。連れていかれたのは西六条のお西さん、本願寺北御門だ。

お西さんは、京の人間が浄土真宗本願寺派の西本願寺を呼ぶときに使う。むろん宗旨は親鸞聖人の弘法である。

東源之丞は御門を潜って広い境内に入ると、庫裏へ入る内門へと磐音を案内した。門番に訪いを乞うと、長いことを待たされた末に庫裏のうちに通された。

「これは東はんやおへんか」

中年の親恵が板の間に現れて、二人を台所に通じた板の間の座敷に案内した。そこはお西さんの事務の中枢部、禅宗で納所と呼ばれる寺の金銭などの出納を行う所だ。

親恵は納所の長と見えた。

「親恵どのは多忙ゆえ、単刀直入にお願いいたす。ちとわけがあって島原の朝霧楼の楼主どのか女将に会いたいのじゃが、仲介の労をとってはいただけぬか。むろん、かような話ゆえ、藩名の儀、相手にはご容赦願いたい」

「東はんのことゆえ、なんなと力にならんとあきまへんな。事情を言いなはれ」

親恵に言われて、源之丞が、

「この者のことにござる……」

と磐音を差し、事情を申し述べた。

「ほう、えらいことでおますな」

と応じた親恵が、

「純情に免じて、紹介はさせてもらいまひょ。無茶しはったら、あきまへんえ」

と、二人を待たせて手紙を一筆認めてくれた。そして、渡すとき、

「藩の名は書いてまへん。会うのんはいいが、あとは金の力でおます。それの目処がたたんことには、どうもなりまへん」

と念を押した。